

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究  
実施方法等

## 【類型 I】

## 1. 実践校について

実践校名	ちばだいがくきょういくがくぶふぞくしょうがっこう 千葉大学教育学部附属小学校		
学科名	児童・生徒数	学級数	
	639 名	19 学級 (うち帰国学級 1 学級 含む)	

## 2. 実践研究の対象

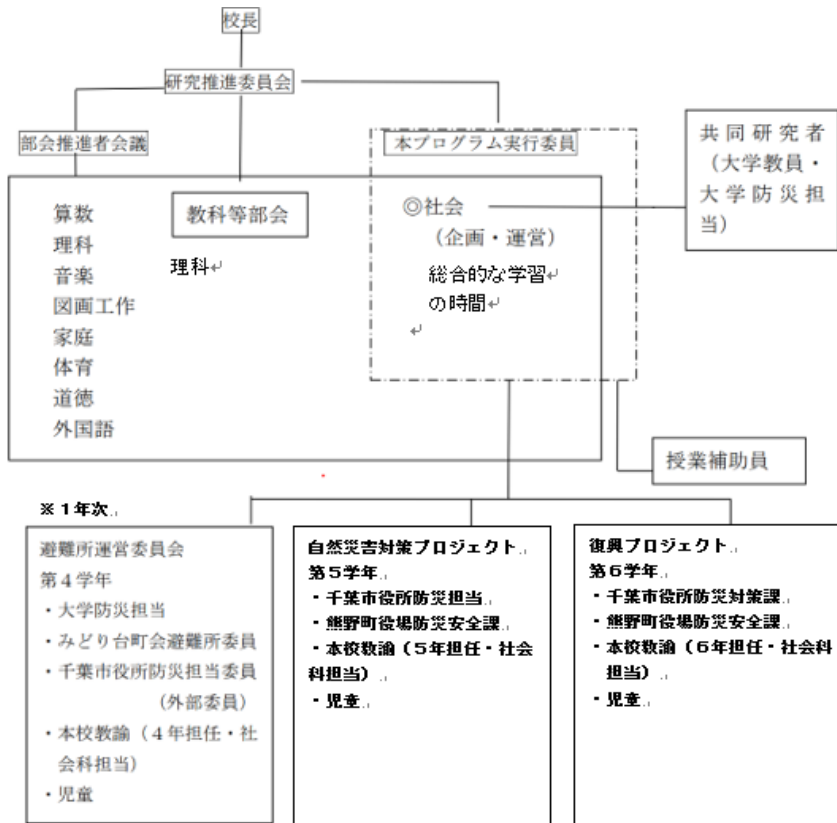
第 5 学年 (105 名)      3 学級

第 6 学年 (34 名)      1 学級

## 3. 実践研究の実施経過

- 4 月～6 月      プログラム・指導案等の再検討 (教科部会・プログラム実行委員会)  
評価方法の再検討 (教科部会・プログラム実行委員会)  
関係者への授業協力依頼
- 7 月            公開研究会においてプログラム内容の再提案
- 8 月            関係者との打ち合わせ (千葉市総務局危機管理部防災対策課)  
単元計画・指導案の立案
- 10 月          被災地域視察・関係者との打ち合わせ (広島県安芸郡熊野町住民生活部防  
災課)
- 9～12 月      単元計画・指導案の決定 (教科部会・学年部会)  
本プログラム実践  
開発プログラムの事後検討
- 1 月            成果発表会 (文部科学省)
- 2～3 月      プログラムのまとめ

#### 4. 実践研究の実施体制



## 実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（概要）

## 【類型 I】

実践校名:千葉大学教育学部附属小学校

## 研究主題

社会とつながる児童の育成  
～ICT を活用して地域とのネットワークづくりを実現する防災教育～

## 主題設定の理由

本プログラムに取り組むにあたり、社会科部で議論したことは、児童にとっての「実社会との接点」をどこに求めるべきか、ということであった。議論の末、それを、「地域社会に生きる大人」とすることとした。では、子どもにとっての「実社会との接点」をどこに求めるべきなのだろうか。子どもにとって地域の大人との関わりは、コミュニケーション能力や共生感を育むことに最も適している。しかし、現代社会では、都市化や家族の変容、ライフスタイルの変化などによって、子どもが地域活動に参加したり、大人と直接関わったりする経験は減少の一途をたどっている。特に本校は、広域学区となっており、学区においてもそれぞれの移住地においても、地域の大人と関わることは難しい。このような、地域社会との関係の希薄化は、本校に限ったことではなく、都市部に住む子どもなら同様に持つ課題であろう。本校のように、学校所在地の周辺地域と自らが居住する2つの身近な地域を持つ子どもが、自分の学校の周りや生活する地域がどのような地域なのか、どのような人々が共に生活しているのか、またその人々と自分はどのような関係性（つながり）があるのかを相対的に認識した上で、自分はどのように生きていくべきかを深く、丁寧に学習していけるようなプログラムが求められていると考えた。本プログラムでは、昨年度に引き続き自分やみんなの命に関わる「防災教育」を1つのキーワードとし、今年度は第5・6学年の2学年を段階的につなげるものとして設定した。

第5学年では、社会科において、日本で起こる自然災害の種類、災害発生 の位置や時期、防災対策などに着目して、国土の自然災害の状況を捉え、自然条件との関連を考える学習を行う。また、第6学年では、国や地方公共団体の政治について学ぶ際に、自然災害からの復旧や復興について、どのように税金が使われ、政治が我々の生活に関わってくるのかを学習する。このような学びを積み上げる中で、各学年の発達の段階に応じて、地域の大人と共に協働する学習活動を仕組んでいく。その経験は、地域社会を知ることにとどまらず、子どもの非認知スキルを育むことに大いに寄与すると考える。また、地域を身近な地域に限定することなく、被災地域の大人の経験を学習の中で積極的に教材としていく。このような学びを通して、子どもは、「自分も地域の一員である」ことや「国民の一人として判断する場面がある」という自覚や地域や国に対する帰属意識を

持ち、様々な社会の課題に対して「みんなが幸せな社会とは？」と問い続ける一歩となるような学習プログラムの開発を目指した。

子どもと地域の大人をつなぐ手立てとして、防災における課題を共に考えていくネットワークづくりの場として、ICT を積極的に活用していくとした。オンラインや一人一台端末を積極的に利用することで、場所を選ばず、多くの大人と子どもがつながることができる。これは、コロナ禍ではない状況においても有効な手段であると考えられ、子どもがリアルな実社会とつながるツールの一つとしての活用が期待できる。本校においても、令和3年度からは、端末が1人1台支給されている。これまで培ってきた Teams におけるオンライン学習のノウハウを活用することが、GIGA スクール構想の一助にもなれば、と考え主題を設定した。

## 概要

- グループウェアを活用し、自然災害における地域課題を子どもと身近な地域や被災地域の大人が協働で考える地域ネットワークづくりを実現するプログラムの開発

## 学習プログラムの主な内容

### 【第5学年】

- ① 日本では自然災害が頻発しており、その被害が大きいことを理解する段階

【社会・7時間】

日本はその地理的要因から自然災害が頻発しているという事実気づかせるために学習問題を立て、問題を解決しながらそれぞれの自然災害の発生要因と国や県などの地方自治体の対策についてまとめた。

- ② 避難所を通して「公助」について学び自身にできることを考える段階

【総合的な学習の時間・4時間】

平成30年豪雨及び熊野東防災交流センターを教材化し、地方自治体の行っている公助について学習したのち、実際の被災を想定し、どのような共助を行うことができるのかについて考え、交流した。

### 【第6学年】

- ① 西日本豪雨のようすや被害の概要について調べる段階

【社会・1時間】

「まさか」の経験を想起することから、自分たちのまちにまさかの自然災害が起こった熊野町防災安全課の方の話から、西日本豪雨のようすや概要をパソコンなどを利用して調べた。

- ② 西日本豪雨の被災地域における大人の経験を学ぶ段階

【社会・2時間】

災害発生直後、復旧期、復興期の被災地域の人々の願いと、それをかなえる国や都道府県、市町村といった地方自治体の政治の働きを、熊野町に住む人々や防災安全課の人々の経験を調べることで理解した。

- ③ 被災地域の経験と身近な地域の課題をつなげる段階

【総合的な学習の時間・6時間】

避難所の課題に対して「行きたくなる避難所」を建設した熊野町に対して、「自宅避難・在宅避難」を呼びかける千葉市の施策について、千葉市防災課の方から話を聞いたり、パソコンで調べたりして、納得できるかできないかについて意見文を書いた。

④ 被災地域の経験に学び、身近な地域の防災の課題について考え発信する段階

【総合的な学習の時間・1時間】

児童の意見を、千葉市防災対策課、熊野町防災安全課の方に発表し、意見交流会を行った。

### 学習プログラムの成果の概要

- 本プログラムに取り組んだことにより、昨年度の実践も踏まえ、第4学年～第6学年において「社会科の自然災害を扱う学習を軸とした防災教育のプログラム」を作成することができた。特に、本校のように、大きな自然災害の経験のない地域で、子どもたちが地域を知り、災害に備える力の育成につながったことが、意見文からわかった。
- ICT 機器や一人一台端末を活用しプログラムに取り組んだ。特に、地理院地図の使い方を習得したことで、児童は他の単元においても積極的に端末を活用し、調べるようになった。このことは、地理的な見方・考え方の獲得に大きく寄与することとなった。なお、今回の研究主題にあるICTを活用した地域とのネットワークづくりについては、セキュリティの問題があり、実現ができなかった。

## 実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（詳細）

## 【類型 I】

## 実践校名:千葉大学教育学部附属小学校

## 【第 5 学年】

学習活動①日本では自然災害が頻発しており，その被害が大きいことを理解する段階

○関連教科「社会科」第 5 学年の内容（5）ア（ア），イ（ア）

- ・日本で頻発している自然災害について問題意識をもたせるため，まず「自然災害が多い国である」ことを理解できるよう資料を準備し，調べ学習を行う。その際，大雨や短時間強雨の発生頻度の推移に加えて，火災保険料率改定の歴史について扱い，自然災害による影響は，私たちの生活に様々な面で影響を及ぼしていること，日本は，その地理的環境により地震や風水害，火山や雪害が多いことを理解できるようにする。

- ・学習内容について

①火災保険料率改定の歴史から、なぜそのようなことが起きてしまっているのかについて学習問題を立てる。

②調べ学習を通して，日本はその地理的要因から自然災害が多く発生する国であること，近年風水害の被害が大きくなっていること，国や県などの地方自治体が自然災害への対策を講じていることを理解させる。

←	契約可能期間←	純率引き上げ←
2014.6←	36年→10年←	3.5%←
2018.5←	変更なし←	5.5%←
2019.10←	変更なし←	4.9%← 割引の導入←
2021.5←	10年→5年←	10.9%←

学習活動②避難所を通して「公助」について学び自身にできることを考える段階

○関連教科「総合的な学習の時間」

- ・広島県安芸郡熊野町に令和 3 年度に建設された「熊野東防災交流センター」と，その建設のきっかけとなった平成 30 年 7 月豪雨について扱うことで，国や地方自治体が公助として自然災害に対して様々な対策を考え，講じていることを理解できるようにする。

- ・学習内容について

①広島県安芸郡熊野町で発生した平成 30 年豪雨について理解する。

熊野東防災交流センター外観



②被災経験を経て建設された「熊野東防災交流センター」に込められた思いや願いを理解する。

③児童が住む自治体の被災リスクについて考え、自身にできる共助を考える。

④町役場の方とオンライン学習を行い、理解を深める。

以上4つの学習を行う。

- ・指導にあたっては、日本において自然災害の被害が増大していること、学習する児童の住む地方自治体でも風水害の被害が起き、それによって生活に大きな影響が及ぼされていることを学習しておく必要がある。

- ・本実践においては、熊野町役場住民生活部防災安全課の担当の方とオンラインにて被災経験や、センター建設にあたっての思いなどをインタビューする授業を行った。学習活動②でも触れるが、児童が自身にできる共助を考え、



それについて講評をもらったり、質問をしたりと有意義な学習となる。

【第6学年】

学習活動① 西日本豪雨のようすや被害の概要について調べる段階【社会・1時間】

「まさか」自分たちの町にこんなことが起こるなんて…

広島県安芸郡熊野町にお勤め (防災安全課)

さん さん

- 児童のまさかの経験の想起から、左のスライドを示し、西日本豪雨のようすをまとめた動画を視聴した。
- 広島県安芸郡熊野町の被害について、パソコンを利用して調べた。

学習活動② 西日本豪雨の被災地域における大人の経験を学ぶ段階【社会・2時間】

- 熊野町役場防災安全課 H さん・S さんのインタビュー記事をもとに発災直前・直後のようすについて話し合った。

広島県安芸郡熊野町役場防災安全課 S さんのお話

① 私は、当時、熊野町で消防団に入団していました。熊野町では、6日にかけて、これまでに例がないほどの大雨になっていました。19時に避難勧告を出すことになっていましたので、役場では、18時半に消防団に集合をかけた。消防車で各地区に避難を促す。放送原稿を渡す準備をしました。しかし、すでに、町内の両サイドにある地区の消防団は役場に来られない状態でした。もう大変な交通渋滞が起こっていたのです。でも、私たちには、そんな情報はなく、状況をはっきりと知ることができませんでした。まだ、この時は、そこまでの危機感というは感じていませんでした。

② 集まった消防団員（全部で10団体のうちの8団体、40名から50名ほど）には、各地区に戻って、避難を呼びかけてもらうことになりましたが、その中でどんどん状況が悪化していきました。タイヤが溝に落ち、大渋滞が発生しているとか、池が決壊するかもしれないから、すぐに下流に避難を呼びかけてくれ、といった話も出てきました。

③ 時間がたつごとに状況が深刻になるのがわかりました。そんな中で、もっとも被害が大きかった大原ハイツの方で火災が起きている。すぐに行ってくれ、といわれ、消火活動を手伝いに行くことになりました。火災現場は大原ハイツの入口でした。到着したときはすでに、土砂災害の第一波も第二波もきていました。おそらく流された車のガソリンが引火したようでも必死に放水しましたが、消防団の装備だけでは、なかなか火が消せるものでもなく…とにかく延焼してほしくないという思いで水をかけ続けました。熊野町は広島市に消防を委託しているのですが…消防隊員が全く来ないです。すべての隊員がほかの現場に出払っていたのだと思います。消火にあったのは、地元熊野町の消防団だけでした。

④ 大原ハイツは、道路が土砂で埋まって、孤立状態になりました。何とか中に入れたのは、地元の建設会社の方が、裏の細い道の土砂を重機で掻き出してくれたおかげです。道が通った、その情報が消防団に入ると、とにかくみんなその道に向ってしまいました。とまれ、といっても無駄です。今思えば、消防団長の指示もなく、ただ助けたいという一心で、使命感だけでそこに入っていました。それが、よいことだったのか…。懐中電灯も装備もそろっているわけはありませんでしたから…。

⑤ 比較的被害の少なかった場所の住人さんたちは、一つの家に集まっていました。その方たちには、「明日、自衛隊が来たら助けに行きますから、ここで待っていてください。」と伝えました。危険な地区に飛び込んだ消防団員は必死に救助活動しました。幸いにもそのことが、一人の救助（足を切断する大けが）につながりましたが…。けがをした人を中心に、避難させようとしたのですが、担架もなかなか届かず…カッパやベニヤ板で搬送しました。そのような活動が夜中の1時からずっと続けました。翌日、自衛隊が来るからということで、いったん大原ハイツを後にしました。

広島県安芸郡熊野町役場防災安全課 H さんのお話

① 私は、当時、防災の仕事はしていませんでした。しかし災害などの緊急時には、緊急時は物資班ということになっていました。7月6日は雨が強くなりそうだというので役場に待機をしていました。夕方くらいには、かなり雨の様子がおかしくなってきたのがわかりました。

② 熊野町の萩原地区というところで川が氾濫して、家が浸水しているということで、先輩職員と土のうを積みに行きました。しかし、あまりの雨で、土のうは積んでみたもののほとんど意味がなかったと記憶しています。

③ 役場に帰るんですが…行きは割と早く、10分くらいで行けたのですが、帰りは裏道を使っても40分以上かかりました。車が浸水で立ち往生していたようです。役場に帰るとすぐに、どうも様子がおかしい、と感じました。これは大変なことになっているぞ、と。役場の電話はなり続け、常にそこにいる人みんなが、電話に出ている状態でした。かなり緊迫した内容の電話もあったよう…職員の中には、手を震わせて対応している人もいました。大原ハイツからの電話もあったようです。

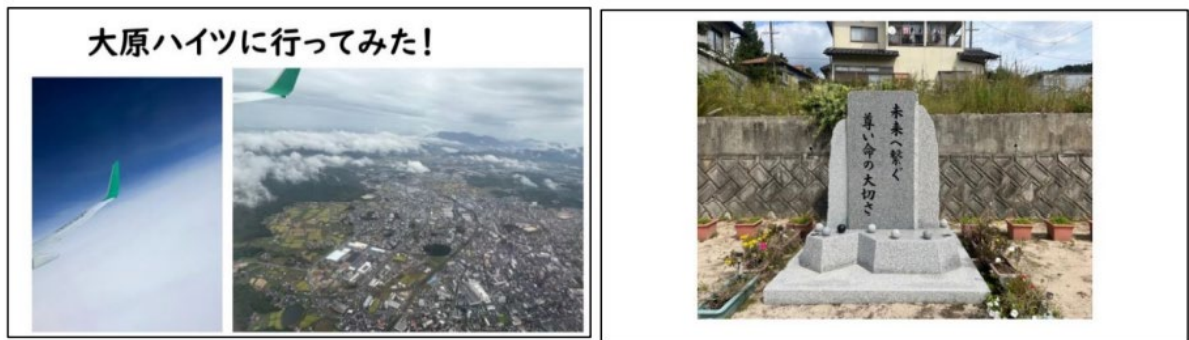
④ そんな中で、(花岡さんが活動していた)大原ハイツに担架を運んでくれ、という指示が来ました。そこで、はじめは大原ハイツが大変なことになっていることを知りました。私は、消防団が助け出した足を切断してしまった男性を役場の車に乗せて…なんとか、町の体育館へ運びました。救急車が来るまで、声をかけながら待ちました。そのあと体育館の避難所を担当することになりました。

コアストーンといわれる1m以上もある大きな岩が、土砂と一緒に流れ出し、家をなぎ倒していった。一階が岩とともに流され、2階がとばされて、残っている家屋もあったという。

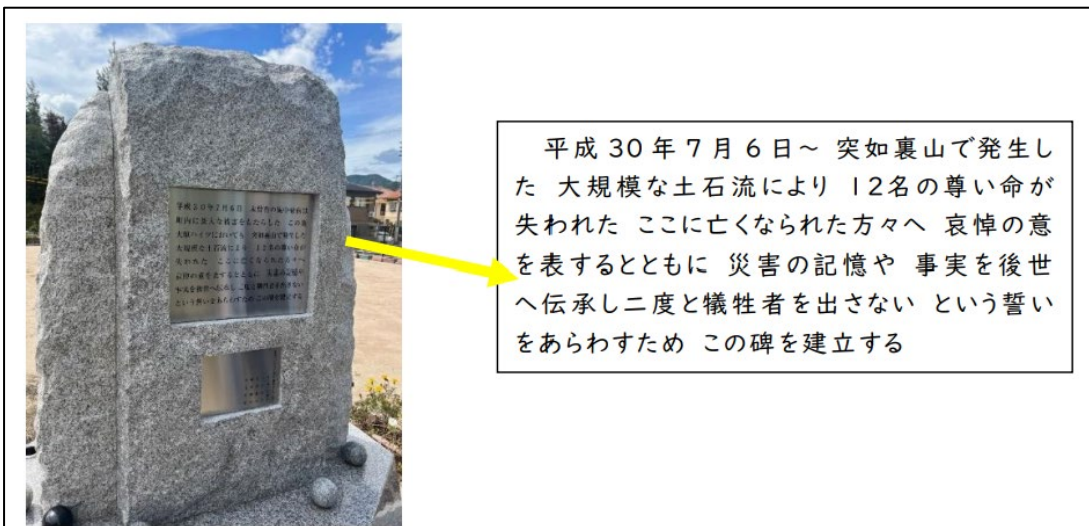
- H さんの記事の中にある「職員の中には、手を震わせて対応している人もいました。」というところから、「どんな内容の電話だったのか？」という問いについて考えた。花岡さんの記事からは、発災前の混乱、発災時消防や警察はすぐにはかけつけられなかったこと、消防団の方々が救助の要となったことを読み取った。また、「翌日に自衛隊が救助に来た、とあるが、だれが呼んだのか。」との問いがあがった。その問いから、発災直後の政治の働きについて教科書や資料集を活用して調べた。



- 授業者が撮影した写真をもとに、「避難所やみなし仮設住宅に住んでいた人は、その後、大原ハイツに戻っているか。」との問いについて話し合った。



- 災害伝承碑の言葉にある「二度と犠牲者を出さない」という誓いは果たされるかについて考え、そのための政治の働きについて、パソコンや資料を基に調べた。特に、大原ハイツにできた砂防ダムや水路がどのような政治の働きによって作られたのかについて調べた。



**学習活動③ 被災地域の経験と身近な地域の課題をつなげる段階**

【総合的な学習の時間・6 時間】

足りなかった勇気（動画視聴）

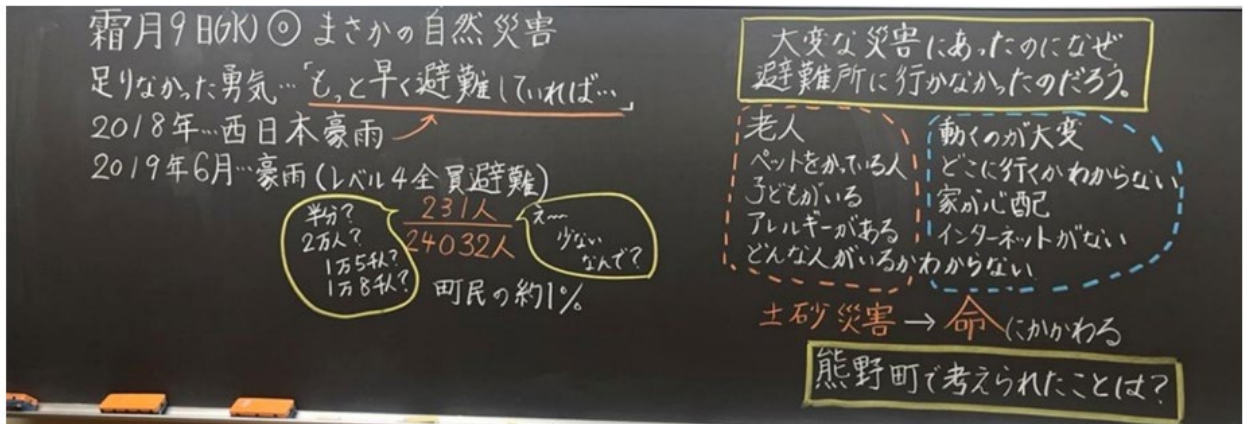
消防団に救出され、  
■さんが、  
寄り添った方が上西さん。

広島県熊野町に暮らす ■ は、2018年の「西日本豪雨」で妻と息子の3人（碑に名前がのっている3人）を亡くした。「**勇気を出して避難していれば…**」 ■さんは家族を守れなかった後悔を抱え続け、家族のアルバムはずっと開けなかった。今は、犬の「福」と暮らす日々。あの日、倒壊した自宅から助け出された愛犬が、■さんを絶望から救ってくれた。災害から命を守る為に何が 필요한のか。男性の教訓を聞きながら考える。（大原ハイツに住んでいて被災）

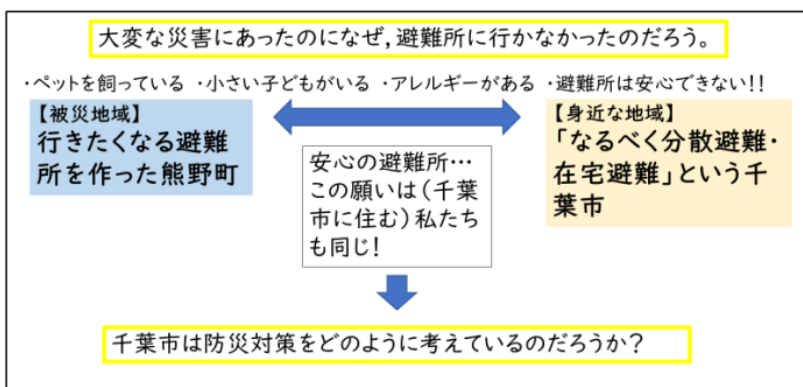
大原ハイツで妻と息子2人を亡くした K さんがあの日、勇気を出して避難していれば…、という後悔の思いを胸に生活するようすがおさめら

れた、広島テレビ制作の動画を視聴した。

- 「もっと早く避難していれば」と後悔する K さんの思いを理解した上で、西日本豪雨の翌年に豪雨によって出された全町避難勧告に対して、避難者が 1%に満たなかった事実について考えた。
- 「大変な災害にあったのになぜ、避難所に行かない人が多かったのか」について話し合った。

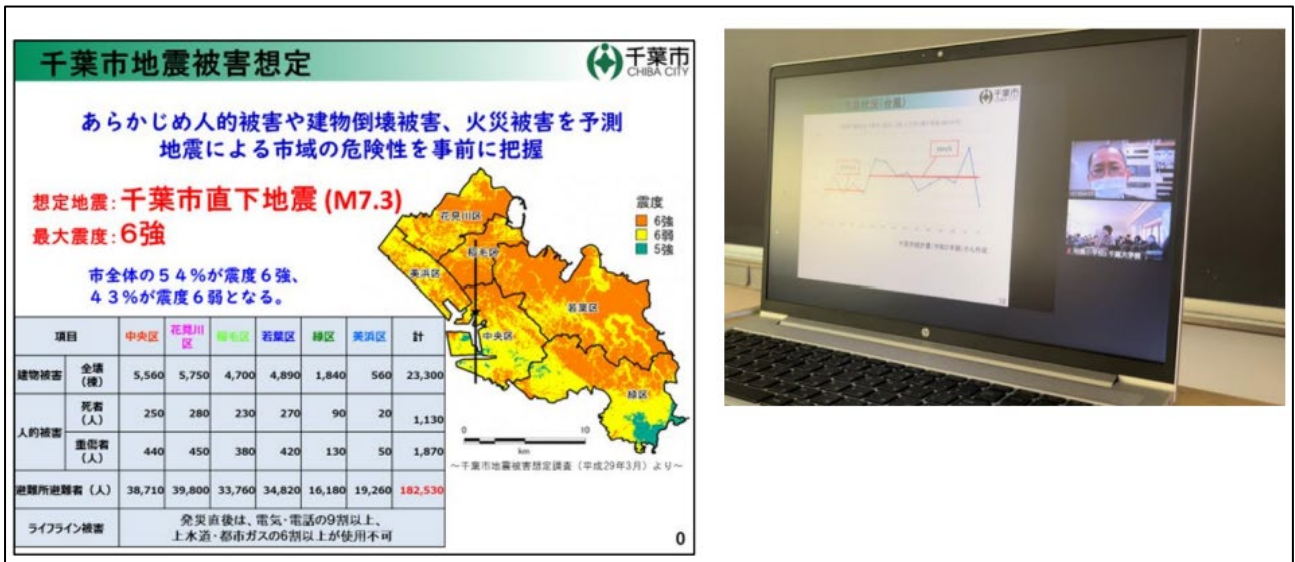


- 避難所の課題に対して、行きたくなる避難所である「熊野東防災交流センター」が設立するまでの熊野町の住民の思いや政治の働きについて調べた。



○その上で、自分たちが住む千葉市の避難所に対する考え「なるべく分散避難・在宅避難をお願いしたい」という防災の施策について、自分の意見をもった。

- 「なるべく分散避難・在宅避難をお願いしたい」という千葉市の防災の施策について、千葉市防災対策課の方に話を聞いた。(Zoom利用)。



- 千葉市の防災に対する施策について、熊野町と千葉市を比較して調べ、千葉市の考えについて納得できるか、できないかについて意見文を書いた。調べる際は、国土地理院の地理院地図のサイトを活用し、土地の高低などにも着目できるようにした。



- 児童が書いた意見文を、グループウェアにアップし、共有して読みあう活動を行った。

**2月8日の課題**

友だちの意見文を読んで、再度意見を書こう！

西日本豪雨の被害にあった熊野町の経験から、千葉市の避難所について考えました。もう一度、「なるべく避難所を使わないで」という千葉市の施策に納得できるか、できないか、考えて、この投稿に返信してください。その際、「A君の意見を読んで…」などと書けるとよいです。

避難所 6年生 意見文.pdf  
6-110 > 社会

02/08 14:11  
H児は、「アレルギーのことを考えると納得できるが、避難できないということは、避難を必要とするひとにとっては命に危険があるので、納得できない」と書いている。多角的な視点で書いていて、少し良いと思った。

4

02/08 14:12  
H児の意見を読んでやっぱり始めと変わらず少し納得できるという意見です。（H児さんとほぼ同じことを言うけど）なぜならいろいろな人がいる中でトラブルになるのは当たり前だから。でも、足りなかった勇気と同じような結末になってしまうと誰が責任を取るのだろうかと思うからです。

9

02/08 14:13  
C児の意見を読んで納得できない点が二つある。  
一つ目は、地震が起きた時に家でじっとしているのは、建物が倒壊する恐れがあったり、家の中のものが倒れてきたりするので避難すべきだと思う。  
二つ目は、地震が起きた際の避難場所が避難所だと建物倒壊の恐れがあるので避難する場所は、避難所ではなく公園や広場などのひらけた場所のほうが、危険性は減ると思う。

[続きを読む](#)

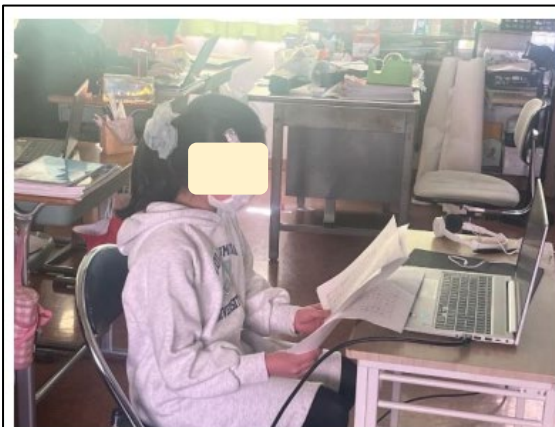
3

02/08 14:13  
G児の意見には自分の意見との違いが分かり避難所が大切、その場にあるものを冷静に判断して利用する、という生きるために大切なことを学びました。 多少自分の意見が変わりました。

#### 学習活動④ 被災地域の経験に学び、身近な地域の防災の課題について考え発信する段階

【総合的な学習の時間・1時間】

- 単元のまとめとして、子どもたちが書いた意見文を熊野町と千葉市の防災担当の方に聞いていただき、意見をいただいた（「避難所・プロジェクト」）。



## 成 果

(児童生徒の変容等)

- ・本プログラムでは、西日本豪雨の被災地域である広島県安芸郡熊野町の被災の経験を社会科の学習で教材化した。その経験を受け、自分たちの地域につながる、「避難行動」や「避難所」の課題について、児童が考え、行政に自分の意見を発信する単元計画を立てた。児童は同じ「避難」という行動でありながらも、熊野町との比較をすることで、自分たちの地域にはどのような特徴があり、どのような防災意識が必要なのか、について実感をもって学ぶことができた。特に、単元のまとめとして行った熊野町・千葉市の防災担当の方との意見交流会の後の児童から、「千葉市の「避難所に来ないでください」というのは「家など避難所より安全なところあるから判断して一番安全なところに行ってください」ということがわかりました。」「災害時には、SNSなどで嘘の情報がながれているのは知らなかった。でも、自分の身は自分で守らなきゃいけないのでメディア・リテラシーは身に着けるべきだと思った。」「熊野町の人話を聞いて、災害についての知識を高められた。生存するために必要なことを学べた気がした。とてもためになりました。」といった意見があがったことは、地域を知り、災害に備える力の育成につながった、と考えられる。
- ・第6学年の実践においては、熊野町の被災の経験を学んだ上で、意見文を書かせる活動を行った。その意見文を書かせる際には、千葉市役所と教室をZoomでつなぎ、防災担当者に話をうかがったり、国土地理院の地理院地図のサイトなどで地形を調べたり、ICTや一人一台端末を活用した。意見文の中には、

「僕は初めて「避難所に来ないでください。」と聞いたときは、避難所に行かないで助かるのか、と思いました。ですが、Sさんの話を聞いて、千葉市は大災害が起きる確率が高いが、自助・共助・公助を上手にできるようになることで、安全・安心に避難することができ、避難所に行く必要も減る、と思うようになりました。ですが、千葉市は標高が低く、津波が来ても避難する高台が少ないため、すばやく避難を開始することのできないシニア層などが多い町などでは、熊野町のような「行きたくなる避難所」を作り、一人でも多くの命を守る手段を作る必要もあると思いました。Sさんの話では、「千葉市地域防災計画」という、地域の市民などだけでなく、ボランティア団体や会社など、すべてが協力して安全を守る取り組みがあると知りました。なので、そこでいろいろな人たちへの配慮をし、避難所に行く人と行かない人への対応を考えることが大切だと思いました。意見をまとめると、避難所を利用しないと安全を確保できない人は避難所に、そうでない人は公助・自助・共助を大切にすることが大事だと思いました。結論を出すと、僕は「避難所に来ないで」というものに対して、一部賛成、一部反対という形になります。」と聞いたことや調べたことを根拠に、熊野町と千葉市を比べることを通して、自分ならではの意見を作っていた。このことは、児童が自分の住む地域に関心を持ち、そこに住む人々のことを多角的に考え社会の課題について、取り組み、考えていく力となった。

- ・本プログラムでは、授業者が被災地域である広島県熊野町に実際に趣き、教材研究することができた。また ICT を活用し、Zoom 等を使って、授業構想などを相談することができた。大きな自然災害の経験がない地域の授業者にとって、現地に行き、その状況を自分の眼で見、話を聞いたことが、教員自身の当事者性ともつながり、身近な地域の防災とつなげていく視点にすることができた。
- ・第5学年の実践では、学習に参加した児童の振り返りの記述からは、「自身の住む地域で災害が起きた際は、自分にできることを進んでできるようにしたい」という意識の児童が、出席児童33名中、26名見られた。災害に対する意識が乏しい実態があった学級においてこれだけの児童が災害に対する意識を変容させており、本実践に一定の効果があったことがわかる。

#### (取組の工夫)

- ① 本プログラムでは、どんな自然災害でも課題となる「避難所・避難行動」を教材とすることで、大きな被災経験のない地域においても、自分との関わりから授業を構想することができた。
- ② 本プログラムでは、被災地域の大人や身近な地域の大人と子どもが考えたことを議論する時間をとった。被災地域の大人の経験を学んだ上で、防災の課題について、大人と語り合う経験は、社会を創造する担い手として充実したものとなった。活動を終えた子どもの感想には、「みなさんが真剣に話を聞いてくれて、うれしかった。」というものが、多く見られた。
- ③ 本校のように、大きな被災経験のない地域でも、被災地域の経験を十分に学び、身近な地域と共通する課題を教材化することで、児童は当事者意識をもって学べるようになった。
- ④ 今回のプログラムでは、千葉市役所、熊野町役場をはじめ、さまざまな外部の方々とのつながりができた。それぞれの担当の方にも、「子どもがこんなに考えられるとは、知らなかった。」とお話しいただき、学校にとっても外部機関にとっても、学びがあった。

#### (他地域でも参考となると考えられる点)

○大きな被災経験のない地域の児童にとって、自然災害を身近に感じることは、実は大変難しい。空間的にも、心理的にも遠い自然災害に対して、授業者が被災地域の経験を学び、身近な地域とつながるような単元構成をすることで、児童は、当事者意識をもって自然災害を学ぶことができる。

○社会科と総合的な学習の時間を、有効に関連付けることで、社会科の自然災害を扱う

学習を，地域の防災教育へとつなげていくことができる。

## 課題

- 本年度も学校周辺に住む大人にも，参加をいただく予定であったが，都合をつけることができなかった。本プログラムを位置づけた年間指導計画を作成し，年度初めに打ち合わせができるとよい。
- 本校のような広域学区では，子どもたちがそれぞれ住む地域とのつながりも考えられるようなプログラムの開発も必要となる。ICT を使用したネットワークづくりについて、セキュリティの問題も含めて今後実現に向けて検討していくことが課題となる。

## 児童が書いた意見文 抜粋

### ①(A児) 千葉市若葉区に居住。若葉区は、大規模に整備された住宅団地がある一方、畑地・林地も多く残る地域。

千葉市の政策に私は納得できる。でも、納得できないところもある。

まず、納得できるところは、千葉市が一番警戒している災害は地震だから。いったん揺れがおさまっても、次いつ揺れがくるかわからない。だから、家にいて!!と言ってるのではないか、ということで、そこは納得できるけど、私が住んでいる地域は標高が高いところにあり、私の家が約14mなのに対して、一番高いところは約28mにもなるから、そこまで高いとちょっと土砂災害の心配もあるんじゃないかと思ったから、納得できない部分もある。でも千葉市全体が標高の差があるわけではないから、千葉市全体でいうと避難しないで!なのかな~と思った。まとめると、千葉市全体では避難しない方がいいと思うけど、私の住んでいる(略)

### ②(B児)はじめ納得できると意見を書き始めたが、書いている途中で、やっぱり納得できなくなってきた、と新しい紙を取りに来た。

#### 【納得できる】

僕は、千葉市の政策について、納得できる部分はある。理由は1つ。それは、千葉市全体の標高差が小さいから。熊野町は標高差が最大で200m程ある。それに対して、千葉市は最大で25mほどある。このように、熊野町と比べて、標高差があまりない千葉市では、災害が起きづらいと考えられる。(違うかも...)すると、避難所には、あまり来なくても大丈夫である。一方...

(ここまで書いて紙を取りに来た)

#### 【納得できない】

僕は、千葉市の防災の政策について納得できない。理由は二つある。

一つ目は千葉市に大きな川がないから。どういうことかという、大きな川がなければ、豪雨災害が起きてしまうと、降った雨水が川にすべて流れることができず、水害が起きてしまう。水害で多くの住宅が水没してしまえば、避難所に避難する必要が出て、避難所にこないで、というのはおかしい。二つ目は、千葉市全体の標高が低いから。これは、地震によって起きる津波や高波、高潮などで海の波が高くなる。標高が低いと波にのみこまれやすい。

### ③(C児)大原ハイツに残された碑に名前が12名のうち5名しか彫られていないことについて、こだわっていた。

私は納得できました。理由は、熊野町と千葉市が警戒している自然災害が違うとわかったからです。熊野町が警戒している土砂災害は、家よりも頑丈な建物に避難する方が安全だと思いますが、千葉市が警戒している地震は、家と避難所の高さもあまり変わらず、避難場所に移動している最中に災害が起きても危険が増えるので、千葉市の考えは、「自分の身、自分の家は自分で守る」なので、家でじっとしていた方が安全なのだと思います。

ですが私には心配な点があります。まず、最初に一番警戒しているのは地震ですが、ほかの災害は大丈夫なのか、ということです。台風などの影響で、土砂災害が起こることもあるとおもいます。その時は、どうすればよいのでしょうか。次に、避難するしかない状況の時にペットはいれられ



ないこともあると思います。その時は、どうしたらいいのでしょうか。千葉市に聞きたいことはまだまだたくさんあります。謎は深まる一方です。

④(D児)私は納得できません。理由は2つあります。まず一つ目に、資料のうちの一つに、避難所に関することが詳しく書かれているものがあります。詳しく書かれているものが用意されていて、準備も十分にできている状態で「来ないで。」というのは少し理不尽な気がします。準備しているということは、万が一のためにだれが来ても大丈夫だ、という状態です。確かに、自分たちで対策することも大事ですが、やはり人々には避難所が必要です。(略)

⑤(E児)僕は初めて「避難所に来ないでください。」と聞いたときは、避難所に行かないで助かるのか、と思いました。ですが、Sさんの話を聞いて、千葉市は大災害が起きる確率が高いが、自助・共助・公助を上手にできるようになることで、安全・安心に避難することができ、避難所に行く必要も減る、と思うようになりました。ですが、千葉市は標高が低く、津波が来ても避難する高台が少ないため、すばやく避難を開始することのできないシニア層などが多い町などでは、熊野町のような「行きたくなる避難所」を作り、一人でも多くの命を守る手段を作る必要もあると思いました。Sさんの話では、「千葉市地域防災計画」という、地域の市民などだけでなく、ボランティア団体や会社など、すべてが協力して安全を守る取り組みがあると知りました。なので、そこでいろいろな人たちへの配慮をし、避難所に行く人と行かない人への対応を考えることが大切だと思いました。

意見をまとめると、避難所を利用しないと安全を確保できない人は避難所に、そうでない人は公助・自助・共助を大切にすることが大事だと思いました。結論を出すと、僕は「避難所に来ないで」というものに対して、一部賛成、一部反対という形になります。

⑥(F児)私は千葉市の防災の政策に納得できました。その理由は3つあります。一つ目は、人口が多いということです。熊野町は人口が約2万2千人なのに対して、千葉市は97万人もいます。これほど大人数が一点に集中してしまうと文句を言い始める人がいたり、場所取りの争いが起きてしまうのではないかと思います。そうなると、新たな問題が生まれ、市も対応しきれなくなってしまうのではないかと思います。

2つ目は、熊野町と千葉市では起こりやすい災害が異なるからです。根拠はそれぞれの地域が最も警戒している災害が違い、熊野町は土砂災害、千葉市は地震ということを千葉市の方にお聞きしました。さらに千葉市では、三十年以内に震度6弱の地震がくる可能性は「62%」と、高い確率だというデータもあります。千葉市は国土地理院の断面図を見ると、熊野町に対して、あまり大きな山などはなく、だいたい平らになっているところが多いので、立地からして土砂災害よりは地震の方が起きやすいと言えるでしょう。ということは、土砂災害が起きる=被害が少ない場所(避難所)へ行くべきだと思いますが、地震は避難しようと外に出ると、電柱や木が倒れてくるなど、逆に危険な目に合ってしまうのではないかと思います。3つ目は、自分の気持ちです。今まで説明したことを考えるとどうしても避難所に行こうという気持ちになれません。避難所の狭いスペースにいるより、いつでも逃げられるようにあらかじめ準備しておいて家で待機(在宅避難)する方が安心できると思います。さらに、私は一匹ペットを飼っているのでも、軽々と避難所に行けるわけではないし、避難所はいろいろな人がいるためアレルギーの人がいる可能性だってあります。そのようなことを考えると本当にその環境がいいのか、と考えてしまいます。私の住んでいる場所は多少坂がありますが、熊野町ほどでは

ないし、そこまで急な坂ではありません。(国土地理院で見ても)なのであまり土砂災害も起きないと思います。私にとっては避難することはメリットよりデメリットの方が多いので、私は千葉市の意見に納得できました。

⑦(G 児)僕は納得できません。理由は、地震に関しては、移動することでのリスクはありますが、いつどのような感じで救助がくるかわかりません。ですので、そういう情報を確実に受け取れる避難所に行くのが一番いいと思うからです。それに、避難所はある程度は安全なところにあるはずですよ。ということは、自分の家で、安全であるかあやふやな場所で、いつ食料も切れるかわからない中では、食料などももらえるひなん所の方がいいと思います。

自分の地域では、山は少ないので、大雨による土砂災害が起こる可能性は低いですが、海が近いので地震による津波は起こる可能性があります。しっかりと情報を受け取って避難すれば間に合うかもしれません。なので、「勇気を出して避難した方がいい」とぼくは思います。

ちなみに、ぼくの近所の避難所は家から約500mが一番近いです。ですが、この避難所は海に近いので津波には弱いんです。ほかにも、およそ4つの避難所があります。この5つの避難所のある地域、地形、特徴を理解したうえで、しっかりとしたその時と場合に合った避難が必要です。なので、自分の家の場所や地域に合わせて被害が違うため、避難所が必要だと思います。

⑧(H 児)H 児自身にアレルギーがあり、授業内でペットの話が出たときも、アレルギーの人のことも考えてほしいと話した。

私は千葉市の対応に少し納得できます。納得できる点は、ペットを連れてきた人やアレルギーの人、障害をもっている人、避難所には、いろいろな人がいる中で、トラブルになるのは当たり前だと思います。そのトラブルが大きくなったとしても、避難所の人には災害が起こっている中で対応できないと思うから、避難をしないでくださいということは少し納得できます。

でも、命の危険な時に避難しないでください、は人の命をうばっていることと同じだと思います。もしその一言で、避難をためらって、命を落としてしまったら、だれが責任をとるのだろうと思います。

なので、私は、千葉市の対応は少し納得できるを選択をしました。

⑨(I 児)私は納得できません。私の家は、山や海が近くにありません。そのため土砂災害や洪水は起きることがありません。しかし、地震が多いため、家が壊れたり、ガスがもれ、火事が起きる可能性があります。なので、「なるべく避難所にこないでください」と言われてしまうと、少しいやな気分になります。

確かに、自助も共助も大切です。しかし、私の住んでいるマンションは、約百七十世帯あります。そのため、一部屋が火事になっただけで、二百人以上の人が避難することになります。そうなると公助もとても大切です。また、マンションの住人の避難も考えると、「なるべく避難所に来ないでください」という言葉通りにはいかないと考えます。だからといって、マンションの人もすぐに避難せず火事にならないように家にいることも必要なことだと思います。

⑩(J 児)私は、なるべく避難所に来ないでほしい」という千葉市の職員の方の話に納得できる。なぜなら、熊野町が最も警戒している土砂災害は、防災センターの設計士がおっしゃっていたように、直ちに人命に関わり、避難所にいないと命が危険にさらされる。

そのため、避難所は、多分「自分の命を守るための場所」になっている。しかし、千葉市の場合もともと警戒している災害は地震で、この災害は直接命にかかわらないため、家が壊れていない人が避難所に行くか行かないかによって命が左右されるわけではないと思う。だから、避難所を「家が壊れた人のための一時的な生活の場所」として開設している。そのため、家が壊れていない人まで避難所に来てしまうと、人口が多いのもあってすごく混んでしまうし、千葉市の避難所の目的とは異なるから、千葉市の職員の方は、「なるべく避難所に来ないでほしい」と話したのだと思う。でも、地震の時は避難所に行かない方がよいというのはわかったが、千葉市は台風もよく来ると私は感じている。台風による大雨の時、私たちはどのように行動すればよいのかわからないので、それを知りたいと思った。

①(K 児) 結論から言うと、私は納得することができた。私は、それを並べて説明していく。まず、熊野町の主な災害は土砂災害だが、千葉の主な災害は地震であり、土砂災害は起きやすい、おきにくいがあり、避難が有効である。しかし、千葉市は地震なため建物の倒壊などで家を失った人と帰宅困難者にさらに避難者が増えると、避難所がキャパオーバーになってしまう。

けれど、避難所を使うな、と言っていない、だから情報の共有は避難所で可能である。ほかにも、災害に備えるための計画で、みんながすることが書いてあるものがある。

津波の被害は千葉市も熊野町もリスクは低い。災害の種類が違えば避難のしかたが大きく変わる。そのため、避難したくなる避難所や、逆に避難しないでというのは、地域の地形と計画すべき災害で変わるので、納得できる。

②(L 児) (略) 千葉市に住んでいる人は、避難するために余計に動いて瓦礫などで怪我をするよりも、家で本当にいざとなったときの非常食やヘルメット・懐中電灯などを用意して安全に過ごしていた方がよいと思ったから、私は千葉市の政策に納得できます。ですが、もちろん百パーセント納得できるわけではありません。私が納得できない点は、ペットを連れてきた人がいるけど、そのペットのアレルギーをもっている人がいるからです。例えば、家族同然である犬を連れてきた人がいますが、避難所にはアレルギーをもっている人もいました。そこでトラブルが起きてしまいました。ですが、避難所の方は、ただでさえ災害のことで手が負えないのです。なので、避難しないでください、というところには納得できるのですが、人の命を背負っているということになると避難した方がよいという点が納得できません。

### (プロジェクト後の感想 抜粋)

・災害時はみんなパニックになるしやっぱりトラブルはおこしてはいけないけど

私の家のちかくにはペットを連れて行っても大丈夫なところがないから

もし本当に家も大変な状況になったらペットも家族だからだめなこところでも自分はずれていってしまいそうだった。

・千葉市の「避難所に来ないでください」というのは「家など避難所より安全なところあるから判断して一番安全なところに行ってください」ということがわかりました。住民の命を守るためにも自分で判断してと言っているのだなと思いました。

・災害時には、SNS などで嘘の情報がながれているのは知らなかった。でも、自分の身は自分で守らなきゃいけないのでメディア・リテラシーは身に着けるべきだと思った。

・熊野町と千葉市の状況がよく分かった。とくに大原ハイツの状況が想像できた。自分で判断する知識をつけるという言葉が確かにと納得できた。

・熊野町の人話を聞いて、災害についての知識を高められた。  
生存するために必要なことを学べた気がした。とてもためになりました。

・実際に熊野町で電話したひと話を聞いて、たくさんのが分かったからよかった。  
災害が起きたことは誰のせいでもないし、一人の責任ではないからあの時自分がこうしてれば、、  
という心残りはなくていいと思う  
みんなが考えていたことに対していろいろな対応をしていたからよく考えているなと思った